報　告

京都文教大学地域連携学生プロジェクト 2021 年度 活動報告

1. 京都文教大学　地域連携学生プロジェクト

京都文教大学では、地域を対象とする学生の自主的活動の中から、地域特性を活かしつつ、成果が期待できる取組みを「地域連携学生プロジェクト」として選定し、支援、助成している（2007 年度～ 2020 年度採択プロジェクト数：延べ 92 団体）。

地域に根ざし、地域に学び、地域への貢献を目指す本学の教育研究目標を達成するために、まちづくりや地域おこしなどへの学部、学科を超えた主体的な取組や、実習や演習などの延長にあり、大学での学びを発展的に展開するような取組、地域の住民・行政機関・地元企業・団体等との連携、協働で展開する取組を「地域連携学生プロジェクト」として採択し、学びと地域貢献を両立させる場として本活動を推進している。

2. 募集概要

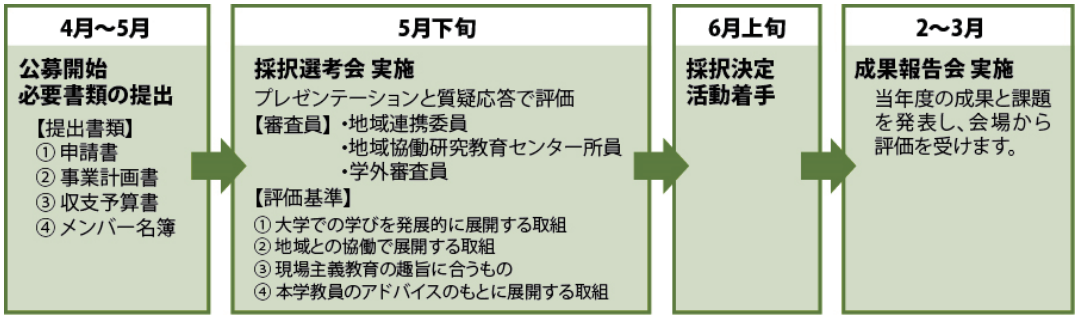
2021 年度は次の通り公募をし、学生団体（4 団体）から申請された。

申請期間：2021 年 4 月 12 日（月）～ 2021 年 4 月 30 日（金）
助成期間：約 1 年間（採択日～ 2022 年 3 月 31 日）
助成金額：上限 25 万円までとする。
申請条件：
・地域と協働および連携を図る事ができるプロジェクトであること。
・本学学生（学部・学科は不問）3 名以上で構成されるチームであること。
・地域パートナーまたは連携先が明確であること。
・適正な経理処理・事業報告ができること。
・学生が依頼し趣旨を理解してサポートする本学教員（アドバイザー教員）がチームに含まれること。

3. 採択までの流れと年間スケジュール

次の通り、年度当初に学内から申請を募り、その後採択選考会を実施し採択の可否を行う。審査は、京都文教大学地域協働研究教育センター員と地域連携委員の学内審査員と、行政・企業・高等学校等から成る学外審査員が行う。

採択された学生団体に年度末に開催する成果報告会の参加と事業報告書の提出を義務づけ、活動のフィードバックを行う。



4. 2021 年度の採択団体

以下の 4 団体が「地域連携学生プロジェクト 2021」に採択され、活動に取組んだ。

※ 【　】内に活動開始年度　≪　≫内にアドバイザー教員名を記載

・宇治☆茶レンジャー　【2010 年度～】　≪森　正美（総合社会学部総合社会学科教授）≫

・商店街活性化隊 しあわせ工房 CanVas　【2014 年度～】　≪片山 明久（総合社会学部総合社会学科准教授）≫

・KASANEO　【2018 年度～】　≪黒宮 一太（総合社会学部総合社会学科准教授）≫

・REACH　【2019 年度～】　≪松田 美枝（臨床心理学部臨床心理学科准教授）≫

京都文教大学地域連携学生プロジェクト 2021
事 業 実 績 書

プロジェクト名	宇治☆茶レンジャー ※活動開始年度：2010 年度 / メンバー数：18 名
事業実施地域	宇治市など
連　携　先	通圓　通円祐介氏　　宇治市茶生産組合副組合長・福文製茶場　福井景一氏 京都府茶業会議所、京都府茶協同組合など
活動の種類	(該当するものを〇で囲んでください。複数選択可) 1 環境保全活動　2 子育て支援活動　3 共助型福祉活動　4 地域の安心・安全 5 地域美化活動　⑥地域産業おこし　⑦地域商業の活性化　8 農村・都市交流活動 9 地域スポーツ振興　⑩地域文化活動　⑪地域行催事　12 その他（　　）
主な活動	（　10　）番　　選択された番号のうち、もっとも重点においている活動を 1 つ選んでください。
地域課題・事業の目的	急須でゆっくりお茶を楽しむ時間が減ってきている一方、宇治茶は、文化的価値や生産、製造の風景・景観の美しさについての評価が高まってきている。また宇治市立小学校での「宇治学」の取り組みの中で宇治茶を学ぶ地域学習の広がりや、海外での日本茶ブームなど、宇治茶を取り巻く環境変化し続けている。本プロジェクトは、学生目線で見つけた「宇治茶」の魅力を幅広い世代に分かりやすく伝え、新たな宇治茶の魅力を創出し、宇治茶文化の振興と継承を目指す。
具体的な事業内容	**【宇治茶デジタルスタンプラリー】** 宇治茶にまつわる歴史や文化のクイズに答えながら、宇治市内のお茶屋さんや施設を巡ることで、楽しみながら宇治茶を学んでもらうイベント。これまでは 1 日限定の対面形式で実施していたが、今年度は、コロナ禍における密や接触を減らすという観点からスマートフォンと QR コードを利用したデジタルスタンプラリーの形式で、約 1 か月間開催した。また、今回は協力店舗を大きく増やし、全 21 ヵ所と過去最多のスタンプポイント数とした。 「宇治茶スタンプラリー」 **【SNS を使った情報発信】** 京都府茶業会議所が中心となり開催するオンラインイベント「玉露で笑顔のおうち時間画像コンテスト」の PR 動画への出演協力。宇治☆茶レンジャーの YouTube チャンネル「宇治茶レ☆茶ンネル」を開設し、宇治茶デジタルスタンプラリーの説明動画を撮影・編集し、投稿した。 **【お茶の淹れ方体験ワークショップ】** 8 月に伏見区主催の連続講座の一環で、10 組の親子を対象にお茶の淹れ方体験ワークショップを行った。水出し煎茶や玉露の淹れ方体験と学生手作りのすごろくなどのゲームを実施した。また、オープンキャンパスやともいきフェスティバルにも参加し、お茶の淹れ方体験ワークショップを行った。11 月には興聖寺と源氏タウン銘店会共催の「お茶広場」で抹茶の石臼引き体験のブースを担当した。

<table>
<tr><td></td><td>

「伏見連続講座」

<u>【日常的なミーティングや研修】</u>
昨年度は新メンバーが加入せず、4 月当初は、3 回生 4 人しかいなかったが、説明会や広報に力を入れ、1, 2 回生 9 名を新メンバーとして受け入れることができた。また、昨年度はオンラインが不慣れで積極的に活動できなかったが、今年度は自粛期間中も急須や茶器、お茶などの道具を自宅に持ち帰り、お茶を淹れながらのオンラインミーティングを継続的に行った。対面活動が可能な時期には、3 回生による宇治の案内や、宇治茶道場「匠の館」でのお茶の淹れ方講座など宇治茶を学ぶ機会を多く設けた。

「お茶屋さん訪問」
</td></tr>
<tr><td>事業の成果</td><td>
<u>【宇治茶デジタルスタンプラリー】</u>
デジタルという形式と、1 か月間という長期開催をすることで地域の方だけでなく、観光で宇治を訪れた方にも多く参加していただくことができ、参加者数は累計 834 人であった。上位の景品の必要スタンプ数を多めに設定することで、今までイベントであまり回ってもらうことのできなかった店舗にも足を運んでもらうことができた。協力店舗にも QR コードを設置する方法は好評で、協力店舗へのアンケートでは「QR コードを設置しての開催であれば来年も参加したい」という意見が 100% であった。初めてのデジタルスタンプラリーという試みであったが、協力店舗・参加者の反応もともに良好でありイベントは成功であったといえる。

<u>【SNS を使った情報発信】</u>
宇治茶デジタルスタンプラリーの説明動画を作成することで、回り方に関する注意点などをわかりやすく伝えることができた。再生回数は 240 回と参加者の約 4 分の 1 以上の方にご覧いただくことができた。また、参加者アンケートからも説明動画がわかりやすかったという回答が約 90% であった。「玉露で笑顔のおうち時間画像コンテスト」の PR 動画出演では、コンテストの PR だけでなく宇治☆茶レンジャーの活動宣伝にもつなげることができた。動画に自分たちが出演することで今後やりたい SNS での動画作成に必要なノウハウを学ぶことができた。
</td></tr>
</table>

	【お茶の淹れ方体験ワークショップ】 ワークショップを行うことでより多くの方に宇治☆茶レンジャーの活動や急須で淹れたお茶の魅力を宣伝できた。今まで宇治市内の育成学級等でのワークショップは行っていたが、伏見区役所との連携は初めてであった。今回の活動で宇治以外の方にも宇治茶を知ってもらうきっかけを作ることができた。ワークショップでは急須を使った水出しを行い、参加者アンケートでは「水で淹れるやり方は目からうろこだった。」と好評であった。また、茶レンジャーの対応を評価していただく項目では 10 組すべての参加者に「とてもよかった」と回答していただいた。
次年度への課題	**【宇治茶デジタルスタンプラリー】** 今まで好評であったクイズを実施することができず、スタンプを集めるだけの単調なものとなってしまった。イベント開催後の参加者アンケートからも例年通りのクイズの実施を望む声が多かった。初めてのデジタル形式での試みということもあり、参加者数の予測や難易度の調整ができておらず、期間の中頃には終了してしまう景品があった。広報活動が不十分であり、開催期間の前半ではあまり多くの方に参加していただくことができなかった。次年度は可能な限り例年実施していたクイズを復活させたい。また、広報活動のためにも早めに計画性をもって準備を進める。 **【SNS を使った情報発信】** 動画の撮影や編集に関する知識が乏しく、自分たちのやりたい企画を形にすることができなかった。また、SNS 等のアカウント関連のトラブルが目立ったため、ログインできる人を制限するなどアカウント管理の徹底が必要と感じた。 **【日常的なミーティングや研修】** イベントやワークショップに参加するメンバーが固定化されており、メンバーの経験値に差ができた。ミーティングではお茶を淹れる機会を多く設けていたが、製法、歴史や宇治のまちについて学ぶ機会が作ることができなかった。次年度では、宇治☆茶レンジャー OG が学芸員を務める「茶づな」での研修や、日頃より連携するお茶屋さんや茶業関係者の方を招いての勉強会の実施を検討していく。
アドバイザー教員からの評価（コメント）	（アドバイザー教員氏名）　森正美【京都文教大学 総合社会学部 教授】
	昨年度はコロナ禍でほとんど活動できなかったが、継続を決めた 3 回生を中心にメンバーを増やし、宇治茶を楽しむところからゆっくりと活動を開始した。まだまだコロナなどの状況に翻弄されてしまうところもあったが、初めてのデジタルスタンプラリーに茶レンジし、手探りながらも諦めずに実施できた点は、本当によかったと思います。　多くのことをスピーディにこなすというチームではありませんでしたが、お互いが支えあい、助け合いながら、活動できたことは、来年度にもつながる成果です。 できれば、宇治茶に関する体験や知識の幅をメンバー自身が今以上に広げていただき、自分の言葉で宇治茶の魅力を語る能力を高めてもらえることを期待します。
地域パートナー連携先からの評価（コメント）	（ご氏名）通円　祐介　様 （ご所属）株式会社　通圓
	コロナ禍で対面でのイベントが出来ない中、開催されたデジタルスタンプラリーでは親子で楽しそうに参加される姿を何組も見ることができ良かったと思います。スタンプラリーを通じてより宇治茶の購入・消費に繋がる仕組みがあればもっと良かったと思い次回に期待します。コロナ前に開催していた聞き茶巡りは人気が高く、聞き茶巡りを参考にしたイベントが全国にありますので、その元祖としてアフターコロナ　新しいイベントを開催していただきたいと思います。

京都文教大学地域連携学生プロジェクト 2021
事 業 実 績 書

プロジェクト名	商店街活性化隊 しあわせ工房 CanVas ※活動開始年度：2014 年度 / メンバー数：43 名
事業実施地域	宇治橋通り商店街を中心とした宇治市内
連　携　先	宇治橋通振興組合
活動の種類	(該当するものを○で囲んでください。複数選択可) 1 環境保全活動　2 子育て支援活動　3 共助型福祉活動　4 地域の安心・安全 5 地域美化活動　6 地域産業おこし　⑦地域商業の活性化　8 農村・都市交流活動 9 地域スポーツ振興　10 地域文化活動　⑪地域行催事　12 その他（　　）
主な活動	（　7　）番　選択された番号のうち、もっとも重点においている活動を 1 つ選んでください。
地域課題・事業の目的	新型コロナウィルスの感染拡大は止まらず、観光地は影響を受け続けている。宇治橋通り商店街も例外ではなく、宇治市の 2020 年の観光入込客数は統計の残る過去 37 年間で最低だったという。このような状況だからこそ、商店街の魅力である、店主さんの商品へのこだわりや何気ないコミュニケーションなどを店主さんに代わって、学生目線で発信し、商店街とお客様、地元住民の方々をつなぐことが事業の目的である。
具体的な事業内容	**①写真展「宇治ふぉと」開催** ・宇治市政策経営部経営戦略課と連携 ・市政だよりにて、写真募集の記事を掲載 ・9 月 15 日～ 10 月 10 日に写真を募集し、11 月 14 日～ 27 日商店街で写真展を開催 ・期間中に 11 月 14 日子供向けワークショップ、11 月 20 日プチロゲイニング開催 ・広報のため、2 回 FM うじのラジオ番組出演 「宇治ふぉと！」 **②宇治ロゲイニング** ・4 月、7 月、10 月 CanVas 新メンバーロゲイニング開催 ・7 月 10 日宇治市アカデミー生向けロゲイニング開催 ・10 月 24 日 KASANEO 展示会プチロゲイニング開催 ・2 月 26 日　京都文教大学学科向けロゲイニング ③ 11 月 23 日 **OneLink フェスタ**（主催：宇治青年会議所）に参加。子ども向けブースを出展 **④宇治商工会議所 NEWS**　宇治商工会議所の会員企業を取材したインタビュー記事を掲載 ・7 月号こはタウン　11 月号小倉商店ネットワーク

「こはタウン取材」

⑤**交流会**　・8 月 28 日、29 日まちづくりカレッジ参加 in 香川
⑥**学内イベント参画**
・6 月 23 日、10 月 7 日　宇治市高齢者アカデミー生交流会
・6 月 20 日、7 月 18 日、8 月 7 日、8 日　　オープンキャンパス参加
・12 月 11 日　ともいきフェスタ参加
⑦**商店街の魅力発信**
・Spiral　Up　（FRO が発行するサテライトキャンパス情報紙）
宇治橋通り商店街の店主さん紹介 CanVas メンバーがインタビューし、作成した記事を掲載
・6 月号丸五薬品さん、11 月号京の花織り Hanamasa さんを取材
・SNS を通じて商店街の情報発信（Instagram をメインに商店街の情報を発信）
⑧オンライン**企業見学会企画**　2 月 22 日
・アースワーク株式会社協力

「アースワーク取材」

⑨**その他**
・代表、副代表が、1 回生メンバー 1 人 1 人と話す面談を実施

事業の成果	①【写真展「宇治ふぉと」について】 「宇治ふぉと」では京都文教大学の学生や、宇治市在住の方を中心に103点の写真を集めた。展示期間には、観光客の方も多く、たくさんの方に写真を見ていただき、宇治の魅力を知ってもらうことができた。商店街を歩いて回ったり、これまで入ったことのないお店に入ったりするきっかけづくりができた。写真展に足を運んでくださった方へのアンケートでは、「宇治のおすすめスポットや新たな発見があった」「普段入らないお店に入ることができた」「商店街が大きな1つのギャラリーになった感じが良い」といった感想をいただいた。また、写真展関連イベントの実施により、写真展の開催を知らなかった人への周知も行うことができた。 ②【Spiral Upの紙面作成について】 店主さんの人柄が伝わる記事作成にこだわり、宇治橋通り商店街の「人」という魅力を発信することができた。 ③【宇治ロゲイニングについて】 規模を縮小しながらも、開催したことにより来年度への課題を発見することができ、改善につなげることができた。開催できない期間は、新しいスポットを探しに行くなど、新しいガイドブック作成への準備を行うことがきた。 ④【宇治商工会議所NEWSについて】 宇治商工会議所の会員企業の魅力を学生目線で伝えることができた。インタビューを通じて新たな関係を構築することができ、今後の活動にもつながる取り組みとなった。 ⑤【オンライン企業見学会について】 10名以上の学生が参加し、企業と就職活動を控える学生をつなぐ機会を創出することができた。
次年度への課題	①【写真展「宇治ふぉと」について】 「宇治ふぉと」写真展では、より多くの方に写真を応募していただくために、広報の仕方や写真展のテーマについて検討が必要である。また、開催期間や展示方法の工夫により、見に行きたいと思える写真展づくりに取り組んでいく必要がある。写真展を継続的に開催することで、写真展自体が宇治橋通り商店街の魅力の一つになるよう努力していく。 ②【宇治ロゲイニングについて】 宇治ロゲイニングを既存の方法にこだわらず、withコロナに対応した新たな方法を探っていく必要がある。 ③【オンライン企業見学会について】 オンライン企業見学会では、より多くの学生に参加してもらうため、広報や参加したくなる企画づくりに力を入れる必要がある。 ④【CanVasとして】 新たな団体・組織との連携が生まれる一方で、新型コロナウイルスの影響もあり宇治橋通り商店街の店主さん方との関係が薄れつつある。商店街に足を運び、関係性を深める必要がある。
アドバイザー教員からの評価（コメント）	（アドバイザー教員氏名）　片山明久【京都文教大学 総合社会学部 准教授】
	コロナ禍で活動が極めて制限される中、写真展の開催やSpiral Up、宇治商工会議所の所報記事の作成など様々な活動を発案し実行した事は、高く評価できます。また運営体制においても、代表・副代表がそれぞれの役割を理解してチームの責任者としっかり意思疎通を図るなど、マネジメント面でも大きな進歩が見られました。
地域パートナー連携先からの評価（コメント）	（氏名）佐脇　至　様 （所属）宇治橋通商店街振興組合
	誰もが初めて経験するコロナ禍の中、学生視点で様々な活動を実施されたことは大いに評価できると思います。 そしてその活動が少なからず宇治橋通り商店街を元気にしていただき、商店街活性化隊CanVasとしての目的を果たされた思っております。

京都文教大学地域連携学生プロジェクト 2021
事 業 実 績 書

プロジェクト名	KASANEO ※活動開始年度：2018 年度 / メンバー数：14 名
事業実施地域	宇治市
連　携　先	主な連携団体等：宇治市健康長寿部長寿生きがい課
活動の種類	(該当するものを〇で囲んでください。複数選択可) 1 環境保全活動　2 子育て支援活動　③共助型福祉活動　④地域の安心・安全 5 地域美化活動　6 地域産業おこし　7 地域商業の活性化　8 農村・都市交流活動 9 地域スポーツ振興　⑩地域文化活動　⑪地域行催事　12 その他（　　）
主な活動	（　3　）番　選択された番号のうち、もっとも重点においている活動を 1 つ選んでください。
地域課題・事業の目的	超高齢社会の現在、多世代で交流し、助け合っていく必要があると考える。しかし、それを実行するには年代差の壁が大きすぎるように感じる。たとえば京都文教大学では、宇治市高齢者アカデミー生が学内にいるにもかかわらず、アカデミー生と学生が交流しているのはごく一部である。世代が異なる者同士で話題のズレなどが生じることは仕方がないことであろう。そこで、歳の離れた者同士でも自然に会話し交流できるような共通の話題を模索した。その結果、20 年周期で流行すると言われているファッションに着目し、ファッションを通じて多世代の自然な交流を可能にする場づくりを目的とした事業に取り組むことにした。
具体的な事業内容	高齢者は、自分の身の回りの物を処分し、終活をはじめている方が多い。その中でも、想い出のこもった衣服をなかなか捨てられずに悩んでいる方が多く、衣服には特別な想い出が詰まっているのではないだろうか。私たちはそこに着目し、古着を「物」としてではなく、「想い出」として受け継ぐために、高齢者に想い出の衣服を提供していただき、それを学生の私服とコーディネートをして衣服を蘇らせ、以下の取り組みで紹介し、ファッションを通した多世代の交流を生み出していった。 **① 6 月 -9 月　京都府立京都すばる高校との共同事業** 高校 3 年生 12 人と一緒に衣服を通した世代間交流を考えた。高校生の家族に聞き取った衣服の想い出や、それぞれの古着に対する想いを 9 月にオンラインで発表してもらった。今まで交流がなかった高校生に、KASANEO の活動を体験してもらう機会となった。 **② 7/4, 7/11　スナップ撮影イベント「夏」 12/18　スナップ撮影イベント「冬」(於 中宇治エリア)** 高齢者に提供していただいた想い出の衣服を紹介する雑誌作成に使用するスナップ写真撮影を目的に、夏と冬の 2 回に分けて初の学外での撮影イベントを行った。当日は、メンバー以外のカメラマン 10 人、モデル 13 人の学生が参加した。参加者に宇治のまちを知ってもらい、雑誌を作成することで一緒に宇治の魅力をカタチにすることができた。 「スナップ撮影イベント」

③ 10/24　KASANEO 展示会 in 中宇治（於 アーバンデザインセンター宇治 / 大阪屋マーケット / 中宇治 yorin）

衣服を通して多世代交流しながら中宇治と KASANEO 双方の魅力を知ってもらうために、3 会場同時に展示会を開催した。想い出の衣服を展示するだけではなく、撮影スポットの設置や同じ地域連携学生プロジェクトである 3 団体のブース設置、オリジナルグッズの販売も行った。当日は目標人数を上回り 110 人の方にご来場いただき、メンバーや来場者同士の交流を生み出した。

「中宇治展示会」

④ KASANEO FES

「KASANEO　FES」

11/25-27　展示会（於 京都文教大学構内の樹心亭）

提供していただいた衣服を、「想い出ラベル（提供者の名前とその衣服の想い出を載せたもの）」とともに展示した。会場内にはシニアメンバーと学生のお気に入りの衣服コラボマネキンを用意し、来場者と KASANEO シニアメンバーの交流促進も図った。3 日間で来場者 44 人。ファッションショーでは衣服とその想い出をゆっくり見てもらうことやお話する時間を十分にとることが不可能であるため、展示会を通してじっくりと衣服を見たり交流を行ったりする時間をつくることができた。

11/27　ファッションショー（於 京都文教大学構内のサロン・ド・パドマ）

KASANEO COLLECTION 8th では、高齢者の方に提供していただいた衣服を学生の私服とコーディネートし、新しく生まれ変わった衣服の姿を披露する場となった。来場者 41 人。また、今回は高齢者の方にもモデルとして出場してもらった。さらに会場内には、ハンドメイドやリサイクル着物の販売やネイルをするブースを設け、ファッション全般を通して交流できる場づくりを行った。

	⑤ ほしい理由オークション ファッションショーで紹介された衣服を受け継ぎたいと思う参加者が「ほしい理由」を発表し、審査員（シニアメンバー 3 名）が衣服を受け継いでもらう人を決定し、今年度は計 9 着の衣服を「想い出」として次の方に受け継ぐことができた。 **⑥ 交流雑誌作成** スナップ撮影イベントで撮影した写真を使用し、多世代に関心を寄せてもらう広報媒体を目的として作成した。今年度は宇治で撮影したため、協力してもらった店舗の紹介も行った。（2022 年 3 月発行） **⑦ 京都知恵産業創造の森が主催する「地域連携支援事業」に申請し、採択** 3/4 にはこの事業に参加している大学が集まり、活動報告を行う報告会が開催される。 **⑦ その他** 5 月　宇治市政だよりへの取材協力（18 日） 6 月　アカデミーアワー（16 日）、滋賀県近江兄弟社高等学校での説明会（18 日）、オープンキャンパス（20 日） 7 月　オープンキャンパス（18 日） 8 月　オープンキャンパス（7, 8 日）、全国まちづくりカレッジ（28 日） 10 月　KASANEO メンバーが主催する演劇ワークショップ「＃ C」に参加（30 日） 12 月　ともいきフェスティバル（11 日） 1 月　宇治商工会議所 NEWS の取材（株式会社 cobit） 2 月　初代代表を招いてのプロジェクトについての講演（19 日） 3 月　北槇 ODEN キックオフイベントへの参加（4 日）、from clothes さんとの意見交流会（7 日）、アカデミーアワー（10 日）
事業の成果	今年度は、新たなイベントの開催や今まで行ってきたイベントに改良を加えることができた。新聞 4 社（京都新聞・毎日新聞・朝日新聞・洛タイ新報）からの取材、ラジオ（FM うじ・京都三条ラジオカフェ）への出演、伏見いきいき市民活動センターが発行する情報誌への掲載などメディアを通じた広報にも力を入れ、このことをきっかけに衣服提供の問い合わせやイベントへの来場につながり、プロジェクトの認知度向上になったのではないかと考える。また、今年度の課題の一つであった「地域にどう貢献できているかを見つけていく」に関しては、コロナの中でもイベントできるタイミングを見つけ地域で対面開催したことで、人と話す場所がなくなっている時期に早い段階で交流するきっかけをつくることができた。KASANEO のイベントをきっかけにして宇治に行こうと足を運ぶ人がいて、新しい店や宇治の魅力を知ってもらえることもできた。
次年度への課題	①　昨年度に比べ、対面やオンラインなどでシニアメンバー（13 人）と一緒に活動する機会が増えた。現在ほとんどが宇治市高齢者アカデミーの卒業生であるが、7 期生以降のシニアメンバーがまだ集まっていないため増やしていく必要があるという声があがっている。メンバー募集リーフレットの作成やイベント開催を通して、新たなシニアメンバーの獲得に力を入れる。 ②　KASANEO 公式アカウントとして利用している Twitter や Instagram の活用の仕方を変えていく。SNS 利用者の増加により、発信した情報は拡散されやすくさらなる認知拡大の効果がある。ビジュアル重視や更新頻度を上げるなど大きな印象を残す工夫をしていくことが活動を知ってもらうきっかけづくりにつながる。 ③　今年度の課題としていた「お世話になった方々との交流を続けていく」を達成することができた。次年度は、活動の幅を広げていくだけでなく、今までお世話になった方とも定期的に交流していき長期的な関係づくりを目指していく。

<table>
<tr><td rowspan="2">アドバイザー
教員からの
評価
（コメント）</td><td>（アドバイザー教員氏名）　黒宮一太【京都文教大学 総合社会学部 准教授】</td></tr>
<tr><td>現3回生を中心とするKASANEOとして2年目となる今年度は、新型コロナウイルスの影響を受け活動への制約が少なくなかった昨年度の経験を活かしながら、KASANEOが活動目的として掲げている「ファッションをとおした多世代の自然な交流を可能にする場づくり」をさらに進展させることができたと評価できる。とくに、2018年度の創設以来の課題になっていた「KASANEOの活動は地域にどのように貢献しているのか」について、1年をとおしてメンバーが考え、かたちにしてきた点は高く評価できる。想い出衣服をじっくり見ながら多世代の交流を深める目的で実施している展示会をはじめて中宇治で開催することにより、学内で実施してきたこれまでとは異なる世代の方たちに多く参加してもらうことが可能になったことで、たとえば、参加してくださったお母さんと幼いお子さんが「これは、おばあちゃんが若いころに流行っていたお洋服なんだよ」と展示される想い出衣服を手にとって母と娘、そしてそこにはいない祖母を交えた会話が生まれていたことに象徴されるように、KASANEOが提供する想い出衣服とそれを年代ごとに3箇所で展示した場が、まさに多世代の自然な交流を生みだしたことがわかる。また、KASANEO FESにおいても、これまで以上に多世代の交流を自然に生みだす仕組みづくりに工夫が凝らされた点が高く評価できる。なかでも、シニアメンバーと学生メンバーが互いに想い出衣服を交換してファッションショーで紹介する試みは、準備段階から衣服の着方を互いに教えあったり試着の手助けを互いにしたりするなど、「ファッションをとおした世代の異なる者同士の自然な交流」を生みだし、地域で支え合う人間関係をつくっていくための工夫の1つのあり方をKASANEOが創りだしたといえる。
3回生を中心にして4回生、2回生、1回生、そしてシニアメンバーが支え合いながら活動を進め、そこに地域の人たちを巻き込み、地域との新しい交流のかたちをつくることができた今年度のKASANEOは、イベント等を開催するたびにKASANEOのさらなる可能性をこれまで以上にさまざまに想像させてくれるものであった。すでにメンバー同士で話し合いを重ね次年度に向けた課題も明確にしており、アドバイザー教員としてだけでなく、KASANEOを応援するファンとしても、次年度にはどんなKASANEOを見せてくれるのか、どんなふうにKASANEOに巻き込んでくれるのか、いまから楽しみでならない。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">地域
パートナー
連携先からの
評価
（コメント）</td><td>（ご氏名）浦井　厚志　様
（ご所属）宇治市役所健康長寿部長寿生きがい課</td></tr>
<tr><td>昨年同様、新型コロナウイルスで活動に制限される中でも、期間を見計らい、KASANEO FESや、ほしい理由オークションといった、シニアメンバーも参加するイベントを開催するなど、活動の幅を最大限広げられました。シニアメンバーを巻き込んだ活動は、宇治市が実施している高齢者アカデミーの事業目的である、多世代交流、地域活動への参加を体現したものであり、受講生の学生生活と卒業後の活動をより充実したものとする貴重な取組です。
時世柄、新しい接点を持つことが難しく、新規参加者の取り込みが難しいとは思いますが、課題にも挙げられている、7期生以降の受講生についても、活動に参加しやすい仕組みづくりをお願いできればと思います。</td></tr>
</table>

京都文教大学地域連携学生プロジェクト 2021
事 業 実 績 書

プロジェクト名	REACH ※活動開始年度：2019 年度 / メンバー数：21 名
事業実施地域	京都府（京都市伏見区・宇治市・京田辺市他）
連　携　先	認定特定非営利活動法人 京都ダルク、三休合同会社
活動の種類	（該当するものを〇で囲んでください。複数選択可） 1 環境保全活動　2 子育て支援活動　③共助型福祉活動　④地域の安心・安全 5 地域美化活動　6 地域産業おこし　7 地域商業の活性化　8 農村・都市交流活動 9 地域スポーツ振興　10 地域文化活動　11 地域行催事　12 その他（　　）
主な活動	（　3　）番　　選択された番号のうち、もっとも重点においている活動を 1 つ選んでください。
地域課題・事業の目的	大学での講義の中では依存症からの回復過程におけるダルクや当事者グループの重要性を学ぶが、大学の一歩外では、薬物依存症回復施設に反対意見を持つ人や、地域に依存症の人が来ることに対して不安を感じる人もいる。大学での学びと地域の現状とのギャップの中で、学生に出来ることやするべきことを考えていく必要がある。REACH では、さまざまな社会的背景を持つ方々とも立場を超えた対等な目線を持ち、人と人との生きた交流をしていくことで、対話と共生が可能な地域と社会のあり方を考える。
具体的な事業内容	① 5 月 20 日社会福祉法人ぐんぐんハウスとの顔合わせを行った。9 月 13 日に座談会を行った。 ② 6 月 11 日宇治商工会議所 NEWS に掲載するインタビューを楠岡義肢製作所にて実施した。 ③ 7 月 17 日京都ダルクとの折り紙での交流会を実施した。（オンライン） ④ 7 月 21 日宇治市高齢者アカデミーのオープンキャンパスにて、REACH の団体紹介やキャンパスツアーを行った。 ⑤ 9 月 2 日に就労継続支援 B 型事業所　三休との顔合わせを行い、9 月 16 日・21 日（オンライン）、10 月 6 日に座談会を実施した。 ⑥ 10 月 28 日、11 月 10 日、12 月 8 日に京都ダルクとのレジンアクセサリーづくりを通した交流会を行った。 ⑦ブラインドカフェ実施に向けた三休との臨時ミーティングを 10 月 17 日、28 日に、11 月 10 日に視覚障がい当事者の方を招き手引きの練習などを行う。11 月 20 日に三休にてブラインドカフェを開催し。3 月 5 日にも開催を予定している。 「ブラインドカフェ」

⑧9月7日に学生団体　SMILEとの交流会を行った。
⑨11月9日、11月23日、12月6日に向島の愛隣館にてNAのオープンミーティングを見学した。
⑩定期的な三休への訪問。利用者の方との交流を目的としREACHメンバーが毎月2回、三休の通常の就労作業の参加を行った。初回は、11月3日に行い、その後も11月30日、12月9日、15日、1月12日に三休での就労作業を行った。
⑪学内でのブラインドウォークの体験を11月17日、11月29日、12月9日に実施した。
⑫12月26日に向島中央公園で開催された元気バザールに出店し、京都ダルクと作成したレジンアクセサリーの販売を行った。

「元気バザール」

⑬三休のカフェの利用者を講師に、手話講座を開催。11月20日に打合せを行った後も月に2回、12月16日、1月6日、1月27日（オンライン）に開催した。3月5日に地域の方も交えた手話歌の披露会を予定している。
⑭12月11日にともいきフェスタにてブラインド体験を行った。
⑮社会福祉法人　世光福祉の会　イマジンに12月22日に訪問した。
⑯11月24日に京都ダルクへのインタビューを行い、その内容を踏まえて2月11日に京都ダルクに焦点を当てた勉強会をオンラインで実施した。
⑰2月14日に開催されるDESIGN　WEEK　KYOTO　2022の楠岡義肢製作所のブースにて、REACHのメンバーがインタビューを行った。それに向けたミーティングを2月3日に実施した（オンライン）。

「【REACH】DWK楠岡義肢製作所」

事業の成果	【全体を通して】 ・これまで REACH とつながりがなかった団体と繋がることができた。 【福祉施設（三休）との連携について】 ・三休での就労作業に、月 2 回コンスタントに参加することで、団体間だけでなく、個人間での交流を深めることが出来た。 ・三休と月 1 ミーティングを設けることで、密に連絡を取り合い、計画を円滑に実行することができるとともに関係性を構築することが出来た。 【依存症関連の取り組みについて】 ・京都ダルクのメンバーにインタビューを行うことで、REACH メンバー内での理解も深まり、地域の方々と正しい知識を持った状態で交流することが出来た。 ・京都ダルクとアクセサリー作りを通して、交流を深め、地域発信のための基盤作りを行う事が出来た。 ・元気バザールでは、京都ダルクと作成したアクセサリーを地域の方々に販売を行い、これまで関心を持っていない方々に対して、京都ダルクを知っていただける機会を提供する事が出来た。販売の際にリーフレットを約 20 部配布することが出来た。 【ブラインド体験イベントについて】 ・ブラインドカフェは、地域の方々に視覚障害について知っていただく機会になった。 ・ともいきフェスティバルでは、ブラインドウォークを実施し遊びを通して普段の見え方と見えにくい世界の違いを体験していただく機会になった。 ・様々な年齢層の方に視覚障がいの体験をしていただくことができた。 ・理解はしていても体験することで得られる見え方の違いを知っていただけた。
次年度への課題	・REACH メンバー間での理念の共有が不十分だった。 ・地域課題に対して関心が薄い方々に対する取り組みが不十分だった。 ・イベントの準備に追われて広報が遅れるなど広報が弱い点。 ・地域課題の解決についてのある程度の目安を定め共有し、その目安を目標に活動を行うことができなかった。 ・オンライン活動がこの先続くことを考慮して先を見据えた企画の予定を立てることができなかった。 ・ブラインドカフェなどこれまでの活動内容をそのまま参考にした部分が多く、主体性を持って 0 から新しい活動を生み出す力に欠けていた。 ・視覚障がい者がかかえる困難以外の部分を伝える工夫が不十分だった。 ・活動内容に対する精査が不十分だった。
アドバイザー教員からの評価（コメント）	（アドバイザー教員氏名）松田美枝【京都文教大学 臨床心理学部 准教授】
	様々な活動を多岐にわたって行い、とてもよく頑張ったと思います。 その一方で、疲弊して離脱するメンバーが出てきたり、そこを一部のメンバーでカバーして負担が偏ったり、活動を続けることの難しさを実感したという側面もあったかと思います。 理念は維持しつつも、活動と休息のメリハリをつけられるようになると息の長い活動に繋げられるかと思います。
地域パートナー連携先からの評価（コメント）	（ご氏名）世古口　敦嗣　様 （ご所属）三休合同会社 _ 三休
	総じて良き動きができています。ただ一部のメンバーの主体性に頼っている部分があるので、他のメンバーが積極的に動けるようになることが課題と思っています。また「パートナー側：学生側」という立場間がまだ残っているので次年度はそれを薄めたいです。そのことでプロジェクトの質がさらに高まっていくでしょう。毎月 2 回の活動をするなかで特別ではない普段通りの三休に入ってくれることでお互いの信頼関係を構築できています。これらを積み重ねることで「メンバーへのインタビュー」や「メンバーのニーズを叶えるような企画」、「三休と地域とのつながりが生まれるアクション」に結び付けることのできる 2022 年度になりますように。本当に REACH の方々には感謝しています。大変ななかありがとうね。
地域パートナー連携先からの評価（コメント）	（ご氏名）加藤　真一　様 （ご所属）認定特定非営利活動法人 京都ダルク
	コロナ禍で活動が制限される中で積極的に交流が持てるように努力してくれていることに感謝しています。NA の見学など薬物依存に真剣に取り組んでいることが感じられ、ダルクのメンバーもリーチさんとの交流を楽しんでいます。今後も交流を重ね、色々と一緒にできることを楽しみにしています。